

Title	貨幣価値本質性概論
Sub Title	
Author	内田, 正孝
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.2 (1929. 2) ,p.227(51)- 255(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19290201-0051
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290201-0051">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290201-0051</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

體社會は、一定の組織によつて生活基礎の實效を擧げ、文化的進展を遂げしむるを  
共に自らも變化するや、此の過程を通じて舊組織を平和裡に終息せしめ、再び新  
秩序と組織の基礎社會として間斷なく存在し文化に貢献しうるのである。  
故は社會政策を以つて社會が社會の爲めに、社會の力に於いて行ふ政策なりと  
解するは過言ではない。唯具體的表現としては社會政策は常に一社會に於ける  
指導的精神を體した統制力の所在にその代行者を見出す。此の代行者は獨自の  
存在を有するにも拘らず、社會的變化の下に、強制的動機を得て社會政策の擔當者  
となりうる。而して之れを成就したる場合に於いてのみ、社會の勢力平衡の理法  
は全體社會の基底を破壊せずに行はれ、圓滿なる社會的進展を遂げるのである。  
(昭和四年一月稿)

## 貨幣價值本質性概論

内田 正孝

凡そ貨幣論上近代に於て最も甚だしき論争を惹起したものは、「貨幣とは何ぞや」との問題なり。  
而して其の相頡頏せる諸説究極の分岐點を形成せるものは、實に貨幣價值の本質性に關する見解な  
りとす。ツトフマンは言へり、「從來の經濟學に於て價值論が全經濟學說の中心に立ち、各種思潮の  
主要論争點及分岐點を爲せるが如く、貨幣理論に於ても亦貨幣價值に關する問題は全貨幣問題の中  
心點に位し、之に關する諸般思潮分岐の究極的標識なり」と(Lieftinck, Grundsätze der Volkswirts-  
schaftslehre, II. Band, S. 144)。洵に貨幣價值本質性に關する見解は貨幣本質の問題に關して重大な  
る役割を演ずるのみならず、貨幣價值變動に關する理論、貨幣制度に關する理論等に於ても、之に  
關する明瞭なる理解は甚だ重要性を有するものなり。吾人は茲に凡ゆる貨幣問題に關聯せしめて貨  
幣價值本質性を論究する事能はされども、「貨幣とは何ぞや」との問題に關聯せしめつゝ、最近に於  
ける主要學者の論説を涉獵し、以て其の一斑を窺はんと欲す。

貨幣價值の本質性に關しては論者を三潮流に分列することを得べし。其の第一班は貨幣の一般的  
交換手段並びに價值の尺度たる職能は貨幣に於ける素材價值の必然性を要求すと爲すクニース、メ

シガリ、ロックス、ディール、ヒルデブランド等の素材價值學說、其の第二班は素材價值の必然性を否定するも尙素材價值無き貨幣に價值性を認めんとするもの、即ち貨幣に於ける價值性は其の職能はも生ずると爲すハイン、ヘルツェリッヒ、ジムメル、ウァーザー、ミーゼス、グルンツェル、左  
右田博士等の職能價值學說にして、ドローリングが其の著書「Die Geldtheorien seit Knapp」に於て素材價值學說と共に一括して商品學說と名附けたるものなり。之に對して第三班は絶対に貨幣の價值を否定せんとするクナッパ、ハンデンリッセン、エルスター等の表券學說或は指圖學說の一派にして、商品學說が賣買を以て交換の高次の形式と爲すに反對し、交換に於ては双方の財貨が評價せらるるも、賣買に於ては財貨のみ評價せられ、貨幣は評價せられず、此場合貨幣は評價の對象たるも、通常貨幣價值と名附くるものは吾人の知る物價より構成されたる一種の反映觀念を過ぎずと爲すものなり。吾人は以下順次此三學說の内容を近世主要學者に就きて検討したる後之が批判を試みんと欲す。

### 第一 商品學說

#### 一 素材價值學說或は金屬主義學說

既に略言せるが如く素材價值學說は貨幣が其の職能を完全に果す爲めには貨幣其自身素材に於て經濟的使用價值を有せざる可からずと爲し、従つて貨幣を使用價值、即ち素材價值を有する貨幣に限り、素材價值無き貨幣即ち紙幣、銀行券等は之を貨幣と見ず、唯單に素材價值を有する貨幣の代用物と見るものにして、貨幣學說史上最古の歴史を有し、久しき時代に跨りて貨幣學說中に卓越せる嚴肅的地位を築き、世界大戰以後の幾多の貨幣問題は此學說の根據に多大の打撃を與へたるにも拘らず、尙相當の支持者を有するものなり。然らば如何なる物を以て貨幣の素材と爲すや。歴史的に觀察せば古來種々なる物資の之に充當せられたるを見るも、歴史上及理論上貨幣素材として最も廣く用ひられ、又最も合理的なるものとして用ひらるるは金屬なり。之即ち此學說が金屬主義學說として表券學說に於ける名目主義學說と相對立せしめらるる所以なり。

吾人は第一に金屬主義學說を述ぶるに當り貨幣學說上に於ける舊大家クニースの所論を引用せんとす。クニースは貨幣の歴史的及法律的方面に就て精密なる觀察を爲せるが、經濟的意味に於ける貨幣は單に一般的交換手段としての職能の外に尙價值及價格の尺度としての職能を満す財貨に過ぎずとせり。即ち貨幣が他の財貨の價值尺度たるは貨幣の素材其自身實體價值を有するが爲にして、他の財貨の價值は貨幣素材の使用價值に對して比較せられ、測定せらるるなりとせり。彼の有名なる章句に於て此關係を明瞭に論じて曰く「數量的に決定し得べき物體を測定する、即ち數量的關係を決定するが爲めには、其自身も測定さるべきものを一定量に於て有するが如き物體を測定手段として用ふる事は自然法上必須なる事に屬す。測定す可き物體に就ての未知量は測定要具に於ける同種の既知量を用ふる事に依りて確認するを得るなり。種々なる具體的財貨の有する特定量の經濟價值が評價せられ、測定せらるるは、其自身經濟價值を有し其自身經濟財貨たる對象を用ふる事に依りてのみ可能なり。」(Kries, Das Geld, S. 147-148)「總ての物體をその使用價值に還元する事に依りて、人間欲望の満足に對する種々なる使用價值の比較が明かにせらるるなり。」(Kries, a. a. O. S. 160)

「貨幣に依り經濟價値が評價せられ、表示せられ、測定せらるゝ意味に於ては、貨幣は單に價値の對象にして、又經濟的自己價値を有する一物體に過ぎず」と力説せり (Kries, a. a. O. S. 148)。從つてクニースは素材價値を有せざる紙幣は國家紙幣の形式に於ては將又銀行券の形式に於ても之を貨幣と認めず、蓋し彼に於ては紙幣は法律的意義に於ても又經濟的意義に於ても貨幣の職能を果さざればなり。

カール・ディールも亦素材價値學說の最も明瞭なる代表者の一人にして、論争に際してクナップ流の名目主義に對して金屬主義を擁護せり。ディールは國民經濟問題を論ずるに當りて常に社會法的觀察に基き、之と同時に法律的觀察方法を須要なるものと爲せり。蓋し法律的規範特に特定の私有財産制度の建設に依りて、特定社會形態が構成せらるればなり。(Dielt, Theoretische Nationalökonomie, S. 400) 從つてディールは國民經濟問題を純粹經濟理論より觀察する事を拒否し法律的方法によりも觀察せる結果、クナップの貨幣國家學說に於けると同様に、貨幣は法制的創造物なりとの解釋に到達せるが、尙貨幣の定義に於て「貨幣は國家が本位の基礎を明かにせる法律的支拂手段」なり (Dielt, Ueber Fragen des Geldwesens und der Valuta während des Krieges und nach dem Kriege, S. 74)。今日の經濟組織に對しては他の財貨に對する比較商品として職能を果し得る素材價値ある貨幣を要求せり。

ディールの見解に従へば、經濟に關する法制は貨幣が素材價値を有せざる可からざるや否やを決定するものなり。現今の如く私有財産制度及自由競争に基ける經濟制度の社會に於ては、貨幣は統制的價格構成に對する前提として其自身素材價値を有せざる可からざるなり。生産及消費の自由なる現今の國民經濟に於ては、總ての商品に對して標準的商品として役立つ「價格財貨」(Presgut)の存在を必要とす。素材價値を缺く一紙片はかゝる標準的商品たるを得ず、蓋し他の財貨の價値を測定する可能性を有せざればなり。(Dielt, a. a. O. S. 104, 106)。

ディールは尙國內交易に於ては貨幣は素材價値を缺くも可なりと爲すクナップ流の主張に反對せり。彼の見解に依れば「世界大戦中の獨逸貨幣は全然素材價値無き貨幣に非ずして金屬貨幣に基ける貨幣代用物に外ならず。戦時中の獨逸貨幣の本質はクナップ流の貨幣學說に對して何等の論證を與へず。不換紙幣は決して貨幣に非ずして國家に對する貸金證券に外ならず、蓋し帝國銀行が銀行券を發行する場合には、銀行は貨幣を與ふるに非ずして、單に貨幣に對する債權を與ふるに過ぎざればなり。」(Dielt, a. a. O. S. 101) かくの如くディールは現今の經濟制度を有する國家に於ては素材價値無き貨幣は之を貨幣と認めざれども、之に反して生産が國家の統一的指揮の下に行はるゝ社會主義國家に於ては素材價値無き貨幣を認めたり。蓋しかゝる國家に於ては各人にその勞働日課及財貨の分量が指定せられ、貨幣は唯國家の貯藏品の一定量に對する指圖を表示するものなるを以て、貨幣は素材價値を有せざるも毫も差支なしと論ぜり。(Dielt, a. a. O. S. 72, 73)。

## 二 職能價値學說

素材價値學說と共に商品學說に包括せらるゝ學說は職能價値學說なり。此學說は充價貨幣を商品と解する點に於て又貨幣を單に表券と解する事を拒否する點に於て素材價値學說の見解と一致すれ

とも、表券貨幣を實體貨幣と理論上同一視する點に於て彼と見解を異にするものなり。職能價值學説は貨幣觀念を素材價值を有せざる貨幣の上に敷衍せり。素材價值を有せざる貨幣は常に貨幣に對する指圖たるのみならず又貴金屬貨幣の價值に依りて指定されたる價值を有する「金屬貨幣の代用物」たるのみならず、尙其職能に關して特殊の充價的財貨なり。貨幣素材の如何は貨幣の本質に對して無意味なる問題にして、貨幣職能は頑迷なる金屬主義學者の採用せる素材價值を有する貨幣に依りてのみ満たさるゝに非ずして、純理論的に觀察するときは尙素材價值を有せざる貨幣、單なる交換價值即ち職能價值を有するに過ぎざる貨幣に依りても能く貨幣職能は満たされ得るなり。即ち今日貨幣の職能に對して意義を有するは貨幣の使用價值に非ずして交換價值なり。斯く貨幣の職能を重要視する點に於て職能價值論者の見解は表券學説の遵奉者のそれと甚だ密接なる關係を有するものなるが、尙前者は常に貨幣の「價值性」を強調する點に於て後者と區別せらる。尙職能價值論は貨幣として素材價值無き貨幣を常に特殊の充價的財貨と見つゝ表券學説の遵奉者の如く純理論上素材價值無き貨幣即ち「表券貨幣」の中に貨幣職能の最も重要なる權化及將來に於ける理想的貨幣の存するを認めたり。従つて職能價值學説並びに表券學説の金屬主義に對する反對の強調せらるゝ場合には、この二學説は例へばヒリポピッチの言へるが如くクナップ學派と共に名目主義と稱するを得るなり。然れども狹義に於ては表券學説のみが本來の名目主義なり、蓋し表券學説は貨幣より使用價值のみならず職能價值をも奪ひ唯貨幣の一定名目的通用力を究極なるものと認むるものなればなり。

近世貨幣學史上に於て職能價值學説の鮮明なる敘述を試み、以て同學説の最も明晰なる代表者を爲すもの之をゲオルグ・ジムメルとす。貨幣は其職能を果す爲めには其自身實體價值たるや又價值たらざる可からざるや、或は實體價值を離れて單なる表券たり表象たるやの問題に關しジムメメルは明瞭に貨幣は其本質上實體價值たるを要せずと切言し、從來の金屬主義に反對せり。世人は云ふ、物を測るものは測らるゝ對象と同種のものならざる可からず、即ち長さを測るものは長さを有し、重さを測るものは重さを有し、又廣さを測るものは空間的延長を有するものならざる可からず。比較せらるゝ二物は假令他の總ての點に於て一致せずとも可なり。雖も、比較せんと欲する性質に就ては一致を有せざる可からず。若し二物が同一性質の相關的數量に關せざる場合に於ては二物間の數量的等不等は意義を有せざるなり。例へば風と人の手が共に枝を折る場合には兩者その性質を異にすれども明かにエネルギーの均等が存するなり。貨幣素材と之に依りて價值が測定さるゝ總ての財貨とは互に性質上不羈たるを得べしと雖も、兩者は價值を有する點に於て一致せざる可からず。従つて貨幣が種々なる價值と比較さるゝ事實即ち前者と後者とが數量的に比較さるゝ事實に徴して、貨幣は價值性を缺く事能はずと。(Simmel, Philosophie des Geldes, S. 101-102)

以上の金屬主義の主張に對してジムメメルは如何に答へたるや。即ち曰く、余は以上の如き主張に對して別個の結論を以て對抗するものなり。洵に上記の例に於て風の力と手の力とは枝を折る場合にかゝる力が兩者に於て性質上同等なる限り比較さるゝものなれども、又風の力は其の折る枝の太さに依りて測る事を得、勿論折られたる枝は手の力量を示すと同一の意味に於ては風の力量を示し

得ざれども二つの風の強度即ち各風の相對的強度は一つの風が枝を折る間に他の風が未だ之を折り得ざる事に依りて能く測定する事を得るなり。次に余は確乎たる例證を示す可し。物質的運動と意識現象とは吾人の一般に知る異種の對象即ち地球の兩極の如きものにして、その一を他に歸着せしむる事は哲學も自然科学も之を爲し遂げ得ざる處なり。兩者の強度の間にその單位として能く共通的に通用するが如き點は未だ發見されず。然れども精神物理學者は刺戟として吾人の感覺に來れる外界の運動の變化に依りて意識的感覚の相對的強度の變化を測定し得るなり。一つの物と他の物との量の間に恒常的關係の存する場合には一物の大きさは他物の相對的大きさを決定するものにして、而も兩者の間に何等數量的關係或は相對性的存在を必要とせざるなり。是に由りて觀れば價值を測定する貨幣の能力を貨幣が其自身價值を有するの事實に據らしむるが如き理論的主張は打破さるゝなり。勿論異なる物體の量を比較し得るは唯兩物體が同一性質なる場合に限り又性質上の相等性が前提され二つの量の間に直接に性質を相等ならしむる事の可能なる場合に限るものなれども、物體間に何等本質的相等性の存在を要せずして二つの量の變化、差異或は關係を測定す可き場合には、測定する物體の割合が測定せらるる物體の割合の中に反映する事を必要とす。即ち此場合に於ては量的に相異せる二物體を比較するに非ずして、二つの割合を比較するものなり。例へば  $m$  と  $n$  との間には何等かの關係ある可きも全然性質的相等の關係に在らずとせば、一方が直接に他方に對して測度として役立つ能はず。今茲に  $a$  なる物體を置き、之を  $m$  とし、更に  $b$  なる物體を置き、 $b$  は  $n$  の何分の一に當るやを知らんとす。此場合若し  $a$  と  $b$  との關係が  $m$  と  $n$  とのそれに相當せば、 $b$  は  $n/4$  ならざる可からず。  $a$  と  $b$  との間に於て全然性質上相等性無く直接比較が不可能なるに拘はらず、斯くする事に依りて之を決定する事を得るなり。かくて貨幣に於て物を測定する事がかゝる例證に従ひて爲さるゝとせば、兩者の直接相等性又貨幣其物の價值性の理論的要求は此限りに於て支持し難きものなり。(Simmel, a. a. O. S. 103-104)

以上の如くジムメルは明瞭に從來の金屬主義の主張に反駁を加へ其の支持す可からざる論據を闡明せり。然らば彼は金屬主義を排しつゝ、直ちに表券學說に趨れるや。否、彼は貨幣の價值が其實體價值より遊離し行く歴史的傾向は之を認められども、又かゝる傾向は無限に繼續し遂に貨幣は無價値なる表券に過ぎざるに至る可しとの名目主義の主張に組する能はざる根據を次の如く説明せり。「經濟價值の純然たる表象の性質は貨幣の發達が之に到達せんと努むるも、而も完全に之に到達する事無き理想なり。勿論貨幣は元來他の價值客體と同一範疇に存し、貨幣の具體的實體價值は他の價值客體と併立せしものなり。交換手段及價值測度に對する需要の増加に伴ひて貨幣は次第に同種の價值を有する物體の中より之を表示するものと爲るに至り、此限りに於て貨幣は其實體價值より獨立す。然れども貨幣は全然其實體價值より脱する能はず、其は本來其内在的本質より結果せる理由より然るに非ずして、寧ろ經濟技術の不完全なる事實より然るなり。其一は交換手段としての貨幣に關聯す。貨幣の自己價值を單なる表象的意義に依りて置き換ふる所以のものは、個々の商品と瞬間的に經濟的作用を爲す商品總量と割合が、或一定の修正の下に於て、一定貨幣額と瞬間的に經濟的作用を爲す貨幣總額との割合に相等しき事、斯る分數の分母は唯實際的のみ作用し意識的には作

用せざる事(蓋し意識さるゝは分數の分母に非ずして、唯現實に交易を決定する分子なればなり)を來從つて斯る交易に於ては物體と貨幣の實體價值との原始的相等性とは全然異なる根柢に基く直接相等性の存在する事實に依るものなり。此の發達が進むとするも、總體價值より成立の諸因素は極端に動搖し、斯く動搖せる因素に依る計算は甚だ不正確たるを免れず。之即ち商品と貨幣との直接的價值比較が全然排除されざる理由の一なりとすべし。貨幣に根ざせる物質的自己價值は、吾人の認識が物體價值の割合を正確に決定するに充分ならざるが爲めに、吾人の必要とする支柱(補足)にして、茲に於て測定さるゝ物體と測定する物體との本質的相等性即ち貨幣の自己價值を放棄する能はざるなり。(Simmel, a. a. O. S. 136-137)

「貨幣が全然其表象的性質に成り切らざる第二の説明は、交易の要素としての貨幣の意義に關聯す。洵に貨幣の交換機能は抽象的に觀する時は單なる表券貨幣に依りて満たされ得れども、之に伴ふ濫用を防止する事は人力の到底爲し得ざる處なり。貨幣の價值測定機能と同じく交換機能は明かに其量の有限性即ち「稀少性」に結合せるものなり。商品及び貨幣の個々の量と總量との割合が妥當するとせば貨幣總量を如何に増加するも其割合は不變たる可く、又價格構成に就ても同様なり。蓋し貨幣分數は分母の増加に際して之に相當せる分子の増加を示し、其價值を變ぜざればなり。唯實際上著しき貨幣増加に際してはかゝる比例性は保たれず。寧ろ實際上貨幣分數の分母が甚だ増加する場合には、當初に於ては勿論、尙總ての取引關係が新しき基本に適合する迄は、貨幣分數の分子は不變なり。斯る分子の絶對値より成る價格も亦不變なれども、價格は相對的に、即ち貨幣分數は甚だ

小となるなり。從つて斯く増加せる貨幣量の所有者特に政府の如きは賣手に對して甚だ有利なる地位に立つも、其反動として取引上に大なる擾亂を生ぜざるを得ず、而も之は政府自身の收入が價值下落せる貨幣にて受入れらるゝ瞬間に初めらる。貨幣分數の分子——商品の價格——は政府の過剰なる貨幣在高が大體に於て支出されたる曉に初めて自然に比例的に上昇するものなり。かくて政府は下落せる貨幣在高を以て騰貴せる必需品を調達せざる可からざる事となり、之に應ぜんが爲めには更に貨幣を發行せざるを得ざるに至る可し。以上は紙幣濫發の惡結果の一例に過ぎず、貨幣が其増加を制限する實體に拘束さるゝ事無きに至るや斯る惡結果は續々生起せざれば止まざる可し。(Simmel, a. a. O. S. 139)

かくてシムメルは一方に從來の金屬主義の主張に反駁を加へ他方に名自主義の主張にも組し得ざる所以を叙述せる後、機能價值論者としての自己の立場を闡明せり。「貨幣が其實體より機能に發達し行く事を以て貨幣が無價值たるに至る事を解するは甚だしき誤解なり。貨幣が實體より機能に分解さるゝ時は機能其自身價值を有する事となり、斯る價值は貨幣の自己價值に附加せられ、金屬貨幣に在りては附加的價值、表券貨幣に在りては唯一の價值たるなり。是恰も機關車が其運輸機能を有する事に依りて其材料以上の價值を有するが如きものなり。勿論貨幣は第二に其が價值を有する事に依りて貨幣機能を果し得るものなれども、次には貨幣機能を果すが故に價值を有するに至るなり。貨幣の價值を其實體價值に求むるは猶機關車の價值を其材料たる鐵の重量に求むるが如し。」(Simmel, a. a. O. S. 192) 「貨幣の價值が其實體より機能に發達する傾向は、貨幣に關する價值感

情が其素材より分離し職能の上に移れる場合に生ず。最初一定の職能を爲す素材を單位として行はる、評價は漸次分化し、貴金屬は貴金屬として依然評價さるゝと共に其職能は特殊的獨立的評價を受くるなり。貨幣が交換を媒介し價值を測定するは貨幣が吾人の爲めに存在する形式にして、金屬は斯る形式を有するが故に貨幣たるなり。價值感情が精鍊さるゝと共に原始的關係より分解されたる形式或は機能は獨立の價值に展開す。斯る貨幣の價值も亦支持者を有せざる可からざるも、最も重要な點は、其價值は最早其支持者を根源とせず寧ろ其支持者は全然第二次的地位に立ち、價值感情の彼方に存する技術的理由より問題とさるゝに至るものなり。(Simmel, a. a. O. S. 196)

カール・ヘルフェリッヒも亦職能價值學說の明晰なる代表者の一人なり。吾人はヘルフェリッヒの貨幣價值觀に入るに先だち其前提を爲す彼の貨幣本質觀に就て簡單なる敘述を試みんと欲す。

先づヘルフェリッヒの貨幣本質觀を觀るに、「貨幣は物其者に非ず少くとも必ずしも物其者たるを必要とせず、寧ろ或對象が國民經濟上一定の職能を爲す限り其は貨幣たる可く、他の職能を爲す限り其貨幣ならず。従つて貨幣の本質は貨幣の實體乃至出現形式に就て之を論ずる能はず、唯其職能に關聯して論ずるを得るのみ。」(Heilbrich, Da. Geld, S. 216-217) 又「貨幣の本質は其職能に存する點を強調せるに、更に此點に關して彼の觀察方法より論ずる處を見ん。彼に従へば貨幣の本質を決定するに二方法あり、その一は國民經濟の全組織を出發點とし其中に於ける貨幣の地位を發見し確定する方法にして、その二は貨幣の個々の職能に出發し各職能を個々に觀察し比較し其本質性を吟味し附隨的職能を捨て本質的職能を確立する方法なり。第一の方法に従ひて彼の結論せる所は、今

日の國民經濟の特質は分業と私有財産に基く交易現象即ち人格間に於ける價值移轉に在り、かゝる交易に於て人格的連環は商人にして物質的連環は貨幣なり、即ち貨幣は交易を媒介するものと爲す。第三の方法に依れば交換手段、支拂手段、價值測定、時間空間を通じての價值支持者、資本交易の媒介者等貨幣職能として列擧せらるゝもの、中、交易媒介たる職能に對して他の職能は單に附隨的なるものに過ぎざるなりとす。即ち何れの方法に従ふも貨幣の本質は交易の媒介者たるに在りとし、かゝる觀念に基く彼の貨幣の定義は「與へられたる經濟區域に於て又與へられたる經濟組織に於て經濟者間の交易(即ち價值の移轉)を媒介す可き正常的任務を有する客體の總體なり」とせらる。(Heilbrich, a. a. O. S. 216-217)

ヘルフェリッヒの貨幣價值觀は、交易を媒介する職能に貨幣の本質を認めんとする彼の貨幣本質觀に基く。即ちクニース及ジムメルは共に價值測定としての貨幣を前提とし、前者は貨幣に實體價值を要求し後者は之に反對せるが、ヘルフェリッヒはかゝる前提は之を誤れるものと爲し、貨幣の價值性を次の如く説明せり。「物體の交換價值は物體が何等かの數量的關係に於て交換せらるゝ事實よりの抽象なり。従て物體が貨幣と交換さるゝ事實より交易物體のみならず貨幣も亦交換價值たる一定客觀的價值量を有すべき事が抽象せらるゝなり。又かゝる抽象より生ずる「交換價值」の觀念より離れ價值の根本現象に立歸へりて考慮するも、尙貨幣の價值性を否定する事能はず。如何なる定義も演繹も單に價值の發生する條件を闡明せるに過ぎずして、斯る價值は條件より由來するものに非ず。客體に對する價值の證明は、既に或客體に前提されたる價值を他の客體に對しても認む可き必要



を意味するものは外ならず。若し吾人が貨幣と交換する商品に對して價值を前提せば、貨幣と商品との間に絶えず交換の行はるゝ事實を徴して、貨幣にも亦かゝる價值を認むべき必要の切實なるを知る可し。價值は其出現形式の如何を問はず外界に於ける客體の主體或は團體の意義に關する主體の判斷に基き、又主體が商品に對して一定の比率の下に貨幣を授受するにせば、其は貨幣は一般的交換手段としての職能を果さんが爲めに商品と同様に價值判斷の對象たり、即ち價值性を有せざる可からざる事を意味するものなり。(Hellerich, a. a. O. S. 535-536)

以上ヘルフリッヒは貨幣の價值性を有せざる可からざる根據を説明せるが、然らば交換に於ては貨幣は依りて其自身が與へらるゝに非ずして單に他の物に對する指圖、代表或は表象が與へらるゝ事、商品と貨幣との交換に際しては本來商品と之に對して與へられたる貨幣の將來獲得し得る他の商品との交換なる事に基きて貨幣は其自身交換に對して無價值なる連環とし其價值性を否定する指圖學說の主張に對して彼は如何に答へたるや、曰く「かゝる反對論は今日の經濟組織に於ける貨幣の地位より見て決して之を正當なりと爲す能はず。若し貨幣が財其者に非ずして單に現實の財に對する表券或は指圖なりとせば、貨幣に對して一定量の一定財を一定人より獲得する可き事となるなり、蓋し指圖され、代表され或は表象さるゝ物を確定する事無くしては如何なる指圖も代表も或は表象も考へ得ざればなり。然れども今日の經濟秩序の下に於ては、何人も貨幣に對して他人より他の財を強要する事を得ず。今日貨幣に對して一般に他の財を獲得し得る事は市場に販賣せらるゝ商品に對して謂はるゝ事なり。貨幣が收受せらるゝは之を以て他の財を獲得せんが爲なるに等しく商品も

亦自己經濟に必要な財を調達せんが爲に生産せらるゝなり。若し指圖なる觀念より其が一定人及一定財に對する一定要求を賦與すと云ふ内容を除き、指圖は不定量に於て又不定人よりの財の調達に役立つと云ふ内容のみを残さば、貨幣のみならず市場に齎らさるゝ總ての商品も亦指圖なり。指圖の觀念をかく決定するに依りて二個の結論を生ず。即ち市場に存する總ての商品に對して獨立的價值性を否定するが、若しくは廣義に於ける「指圖」に對して獨立的價值性の存在し得る事を認容せざる可からざる事なり。若し指圖なる觀念の限界が明かにさるゝに於ては、指圖は示されたる方向に従ひて決定されたる内容を有するものなる事、従つて指圖は可變的關係の下に指定されたる物と交換され得ざる事、又交換に際して可變的評價の行はるゝ場合には交換さるゝ物體が相互に獨立せる價值性を有するは不可欠なる前提たる事が確證せらるゝなり。従つて貨幣は不定的價值對象に對する指圖に非ずして、其自身價值對象たるなり。(Hellerich, a. a. O. S. 532-534)

以上吾人はヘルフリッヒが貨幣に價值を要求せる根據を明かにせるが、然らば如何なる價值を貨幣に認めたるやに就て更に論及せん。價值性が貨幣の主要なる特性たる事は、貨幣の價值が實體價值たらざる可からざる事を意味するものに非ず。貨幣の價值はその素材に依りて與へらるゝに非ずして、唯國民經濟上不可缺なる貨幣職能を果す事に基きて與へらるゝなり。之即ち紙幣が其素材の殆ど無價值なるに拘はらず能く貨幣としての價值を保有し、又制限鑄造の銀本位に於て銀貨は銀地金より大體に於て高價なる所以なり。従つて貨幣の價值は必ずしも「素材價值」たるを要せず、寧ろ單なる「職能價值」たり得るなり。(Hellerich, a. a. O. S. 535-536)

次に彼は經濟價值發生に就ての二個の前提より貨幣價值を論じて曰く、「經濟價值の第一の前提は人の欲望を満足せしむるに在り。而して財貨は必ずしも直接に欲望を満足せしむるを要せず、間接的に之を爲す財貨あり。財貨、効用の人格間に於ける移轉を媒介すべき主要なる任務を有する貨幣は後者に屬す。従つて今日の經濟組織に於ては、貨幣は一方に於て他の經濟財と同じく欲望の對象たる前提を有し、他方に於て他の經濟財は貨幣と同じく其が價值を有するは其單なる「存在」即ち「實體」に依るに非ずして寧ろ直接に若しくは間接に一定「職能」を遂行する事に依りて人の欲望を満足せしむる事に依ると云ふ特徴を有せざる可からざるなり。是に由りて觀れば總ての經濟價值は「職能價值」にして、「實體價值」なるものは存在せざるなり。經濟價值の第二の前提は財の稀少性に在り。貴金屬貨幣の價值は此前提を満足せしむれども、殆ど費用を要せずして造らるる紙幣は如何にして此前提を満足せしめ得るや。財の稀少性、即ち之を得る事の困難は必ずしも自然的特性にのみ基くを要せず社會及國民經濟の法律的規定に基くを得るなり。例へば財貨の造出及所有を或個人或は團體の獨占に歸せしむる事之なり。即ちかゝる社會的規定に基く社會的困難に依りて財に價值が與へられ、又其價值が上騰するを得るなり。貨幣の造出に就てかゝる社會的規定を司るは國家なり。即ち國家の統制に依りて紙幣は稀少性を有し、従つて經濟價值の第二の前提を確立するものなり。」(Helffeich, a. a. O. S. 536-538)

## 第二 表券學說

以上述べし商品學說に在りては貨幣を觀察するに際し貨幣の價值に關する問題を第二に重要視し、素材價值學說に在りては貨幣の素材に、職能價值學說に在りてはその職能に價值の存する事を認めたるが、表券學說は貨幣其自身如何なる意味に於ても價值を有する事を認めず、貨幣を單に表券と解釋するものなり。かゝる思潮に基く表券學說は之を二潮流に分つを得。その一は國民經濟學に於て價值理論を排除しつゝ、貨幣を説明するが如き觀察方法より、貨幣を單なる價值の符號たり、計算單位たり、指圖たりと解釋する學說にして、一般に指圖學說として知らるるものなり。此學說は貨幣を交換理論の範圍内に於て觀察し、貨幣理論の中心を爲すものは價值問題に非ずして價格問題なりとす。表券學說に於ける他の思潮は全然「國家學說」に基くものにして、クナップ及その遵奉學者の代表する學派なり。此學派の見解に従へば貨幣は國家的法制的創造物にして、國家の宣言せる名目的價值單位にて表はされたる通用力を有する表券に過ぎざるなり。「國家學說」は貨幣の經濟學上の問題に對しては何等の説明を與へず、寧ろかゝる問題より全然離れて法學的に貨幣を説明する事を試みたるものなり。貨幣觀察に際して國家的法制的意義を偏重したる點は後世國民經濟學者の痛撃する所となり、經濟學者は國家學說を經濟學的貨幣理論に依りて補足し、或は經濟理論に結合せしむる事を考究せり。

貨幣問題を觀察するに當りて國家的法制的意義を重要視したる事は勿論クナップに初まれる事に非ず。遠くアリストテレス、ニコラス・バトボン、ボンシトコフ、近くはブコイ、オッペンハイム等皆この點に於て先驅を爲せども、近世に於て從來の金屬主義の主張に對抗し、貨幣に於ける國家的法制的意義を極度に強調したるクナップは常に「國家學說」の創始者として目せらる可きなり。

彼は其の著 "Staatliche Theorie des Geldes" の卷頭に於て、「貨幣は法制の創造物なり。其は歴史  
上種々なる形式に於て現れ、従つて貨幣理論は唯法制的にのみ可能なり」と切言し、(Knapp, a.  
a. O. S. 7) 先づ自己の論據を闡明したる後貨幣の本質を其の素材たる金屬に歸せしめんとする金  
屬主義の主張に對し、「貨幣の真髓は其の板金の素材に在らずして、その使用を規定する法制に在り」  
(Knapp, a. a. O. S. 2) として之に反對せり。クナップに從へば貨幣の本質既に金屬とは何等の關  
係無きを以て、其の呼ばるゝ價值單位は一定量の金屬として定義する事能はず、之法律的觀念にし  
て唯先行せる價值單位に關聯して歴史的にのみ定義し得るものなり。價值單位は支拂の大きさを表  
示する名目的單位なり。即ち貨幣に就て重要な事はその通用力はその素材的内容に結合せずして  
法制の宣言に基く事、又其の價值單位は唯歴史的にのみ定義し得る事にして、爾餘の事項は如何に  
必要なるものと雖も貨幣の本質には屬せざるなり。(Knapp, a. a. O. S. 20) 而してクナップに在  
りては貨幣の通用力及價值單位は共に國家的法制の規定する所にして、支拂手段を採擇し決定する  
事、支拂手段を新價值單位に從ひて名附くる事、及新價值單位を舊價值單位に依りて決定する事は  
國家權力の自由行動に屬するものとせらるゝなり (Knapp, a. a. O. S. 19)。

クナップに從へば貨幣は表券的支拂手段なり。價值單位にて呼稱せらるゝ債務は、法律が價值單  
位に依りて表示せる通用力を有する印象されたる個片——夫が貨なるも將又證券なるも——を讓與  
する事に依りて決済され得るなり。即ちかゝる債務は名目的價值單位に依りて表示せらるゝが故に、  
國家の規定せる其時々支拂手段を以て決済し得べきものにして、決して債務決済手段の内容は確

定せるものに非ず。之即ち價值單位に於て呼ばるゝ債務が名目性を有する所以なり。而して價值單  
位及従つて又債務の名目性は貨幣發生の前提條件なり。従つて金屬秤量制の下に於ける支拂手段は  
尙貨幣ならず、蓋し其は貨幣の本質に屬する名目的價值單位を有せざればなり。法制、名目性及支  
拂手段は國家學說の基本觀念を築くものなり。

以上吾人はクナップの國家學說を概説せるが、次に貨幣價值に關する彼の見解並びに同問題に對  
する彼の態度を窺知せん。クナップ曰く「貨幣價值なるものは他の事物と關係無く其物として  
觀察するときは、之を以て何物をも理解する能はざる全く不明瞭なる觀念なり。ショーペンハウエ  
ルも云へるが如く、價值は第一に其人に對して相對的なるものにして、第二に其を評價する他の物  
に對して比較的なるものなり。此二個の關係を除きては價值は總ての意義を失ふ。世人此言を忘れ  
貨幣價值其物が存在するやに思惟すれども、所謂貨幣價值なるものは存在せず。吾人は決して貨幣  
は如何なる意味に於ても價值を有せずと云ふに非ず、寧ろ貨幣は多様な意味に於て價值を有し得  
べし。然れども貨幣は貨幣價值を問題とすべき意義を有せざるなり」(Knapp, a. a. O. S. 436, 437)  
とし、貨幣價值其物の存在を否定したる後貨幣價值なる觀念の不明瞭不合理なる點を指摘し、而して  
貨幣價值問題と國家學說との關係を五項に分ちて論ぜり。

「第一に世人が所謂貨幣價值を定むるに當りて統計的方法に依り、即ち或一個の特定財貨を得るに  
一定時期に例へば十二の價值單位を以て足りしに、次の時期に十三の價值單位を以てせざる可から  
ざる場合に、貨幣價值の下落を云々すれども、之は以前に商品たりしものを次には支拂手段と觀、

又以前に支拂手段たりしものを商品と観るものなれば、貨幣と商品との相互關係を轉倒せるものなり。總ての關係に於ける貨幣價值に關して、統計的方法を用ふる事の當否は問題にして、かゝる觀察は國家學說の關與せざる所なり。統計的價格研究より生ずるものは法律的には全く關係を有せず、又國家は貨幣價值の變動性を認めざるなり。第二には同様の統計的方法に於て第一の如く單一の財貨に限らず或範圍の財貨の價格變動に基ける所謂物價指數を以て、貨幣價值を測定せんとするものにして、此場合に於ても亦貨幣は價值を有す可き物體として觀察され、選定せられたる商品は貨幣と比較せる可き物體として觀察さるゝなり。而してかゝる商品の價格變動は恰も貨幣價值（正しくは個片の通用力）の變動を示すが如くなれども、法律的概念としての通用力は貨幣に依りて購買せらるゝものとは全然關係無く、物價指數の如きは貨幣の法律的特性に關して何物をも教示せず、從つて國家學說の關與する所に非ざるなり。第三は貨幣價值が經濟者の收入に關して云はるゝ場合なり。物價騰貴に際しては一定收入を有する官吏の如きは支出の増加に依りて不利なる地位に陥れども、自己の生産物を賣却して收入を得る農夫の如きはその生産物の價格騰貴せる事に依りて収入は増加を來す可きなり。かくの如く物價騰貴は各階級を異れる利害に導くものなり。洵に階級の利益は重大なる意義を有すれども、かくの如き事は國家學說の述ぶる貨幣制度とは何等關係を有せざるなり。第四、貨幣價值は金利の關係より云はるゝ事あり。高率なる利子の要求せらるゝ場合には貨幣價值大なりと云ひ、利子の低率なる場合には貨幣價值小なりと云ふ。然れども此場合には勿論利子の高低が云はるゝものにして、かく云はずして貨幣價值の高低を云々するは、物價と金利とを混同せる

結果なり。蓋し此場合に於ては前述の場合の如く商品の價格に就て云はるゝに非ずして、問題は元金の何分が年々債權者に支拂はる可きかとの事なり。如何にして此の根本的に相異せる二個の事物を「貨幣價值」なる同一表語の下に結合せしめ得るや。かゝる纏絡の結果は「貨幣價值」なる表語の背後に解決さる可き深き謎の存するが如き印象を與ふるものなるが、之は多様な現象に對して不完全なる表語を用ふるが故なるを以て、かゝる謎の解決の鍵は多様な現象を個々に觀察し之を完全に叙述する點に在り。貨幣價值なる表語は此點に於て頗る不合理なるものと云はざる可からず。如何なる合理的學說も不合理なる問題に答ふるを得ず、之吾人の學說が貨幣價值問題に關與せざる所以なり。第五に貨幣價值は紙幣の増減に就て云はるゝ事あり。特に戰時中及戰後に於て國家の紙幣増發の結果として貨幣價值下落が問題とせらるゝ場合あれども、國家が戰爭に際してその財政上の必要に應ぜんが爲には紙幣増發に據らざる可からざるや、或は他に優れる方法ありやの問題を研究するは國家を經濟的人格者として解釋する財政學の任務にして、かゝる問題は國家學說に屬せざる所なり。即ち國家學說は國家を以て支拂本質を法律に從ひて統制する上司として解釋するものなるを以て、其が經濟的方面に如何なる意義を有するやは國家學說の關與する處に非ざるなり。(Kna-pp. a. 2. O. S. 436-448)

凡そ實際生活上又經濟理論上興味ある事は貨幣の意義に對する認識と見らるゝ價值乃至は購買力の意味に於ける貨幣價值の問題なり。クナップは之を國家學說に屬せずして一般經濟理論の問題なりとして之に關與する事を拒否せり。即ち彼は金屬主義の貨幣價值の本質性に關する觀念に一矢を

酬ひたるも、而も自ら貨幣價值の本質性従つて其決定變動に關して何等積極的に理論の建設を爲さざりしなり。

クナップの築きし論據に基き而もその國家學說を經濟學的説明に依りて補足せんとし、明かに指圖學說を認めたる最初の近世學者をフリードリッヒ・ベンディクセンなりとす。ベンディクセンは決して指圖學說の創始者として自する能はず。クナップ以前の貨幣理論に關する文獻中に於て吾人は其萌芽を見る事屢、なれども、クナップ以後に於て金屬主義に對立して國家學說を擁護しつつ、明瞭に指圖學說を強調せる近世學者は之をベンディクセンに於て見る可きなり。彼はクナップの貨幣學說が法律的解釋に偏し經濟的説明を爲さざりし非難に對し、「國家學說は貨幣の基本的理論にして乘算表の如く議論の余地なし、貨幣を理論的に取扱はんが爲めには先づ之を攻究せざる可からず、貨幣の經濟理論はクナップの止まりたる處に初めらるゝなり。」(Währungspolitik und Geldtheorie, S. 120)と論じて一方にクナップの國家學說を擁護すると同時に他方に其補足の必要を認めたり。

ベンディクセンに従へば現今國民經濟の特徴は生産が他人の消費の爲めにせられ、各人は社會の爲めに勞働し、總ての人は總ての人の爲めに勞働する事なり。かゝる經濟組織は二個の前提を有し、第一世人の認むる價值單位を用ひて價值を計算する事の一般に可能なる事、第二かゝる價值單位を表示し又給付せられたる勤勞及其價值の證書として一般に認められたる表券を使用する事之なり。かゝる前提を滿すものは即ち貨幣にして而も今日の形式に於ける振替貨幣なり。(Bendixen, Das Wesen des Geldes, S. 30-30)かゝる如くベンディクセンは今日の經濟社會に在りて生産より消費へ

の過程に於て貨幣の介入を必要と爲し、かくて貨幣を生産と消費との媒介物たるものなりとせり。勤勞或は財貨の給付に對して貨幣を受取りたる者は、唯私法上のみ決濟せられたるに過ぎず、國民經濟上に於ては彼の爲せし給付に相當せる反對給付に對する合法的請求權として貨幣を所有するなり。ベンディクセンは貨幣の本質を説明して曰く、「貨幣は法律上に於ては支拂手段にして、國民經濟上に於ては豫め爲されたる給付に依りて與へられたる賣買され消費せる可き生産物に對する請求權なり」(Bendixen, a. a. O. S. 30)即ちベンディクセンは貨幣を單に「權利」と解釋し、又「指圖」「表券」或は「表象」として説明せり。彼に於ては經濟上貨幣は支拂手段ならず、況や交換財たるものに非ず。貨幣は單に「權利」たり「表券」たるを以て其自身價值を有せず、従つて貨幣價值に關する理論の存在を否定し、「價值論は貨幣を理解する上に於て無用なるのみならず却て誤りに導くものにして、貨幣理論を不明瞭たらしめたるはその責、價值論者に在り」とせり。(Bendixen, Währungspolitik usw., S. 137)。

ベンディクセンは貨幣理論より價值論を排除し、貨幣を單に表券と認めたるが、而も彼の見解は彼の師クナップと本質的に相異する點あり。クナップは具體的貨幣即ち表券的支拂手段のみを貨幣と認めたるが、ベンディクセンは觀念上貨幣表券に先行せる抽象的價值單位其者を總ての價值の共通的表示者(公分母)即ち貨幣として觀察せり。(Bendixen, Geld und Kapital, S. 22)尙ベンディクセンはクナップの如く價值單位を單に形式的法理上より「國家によりて規定されたる大きさ」とのみ觀察せずして、經濟上より「價值表示」而も「總ての財貨に認められたる價格」の派生物とし

ての「價值表示」として觀察せり。(Bendixen, Währungslehre usw., S. 123)

吾人は更に歩を進めてベンディクセンが「貨幣は其自身價值を有せず」とし、従つて貨幣理論中に價值問題の存在を認めざる所以を闡明せんと欲す。「價值は明かに面積或は重量の如く事物の特性に非ず。價值は事物に存せずして人の觀念に存す。即ち事物の價值は人の思考の結果なり。而も或物の價值は他の物の價值との關係に於て云はるゝものにして、其物に對して云はるゝものに非ず。従つてかゝる價值の關係を比較する必要を生ずるものなるが、かゝる關係は分數に外ならず、異なる分母を有する多數の分數の比較は通分に依りて可能となり、かゝる場合貨幣は公分母として役立つものなり。公分母としての貨幣は抽象的價值單位なり。抽象的價值單位は其自身價值を有し得ざるは理論上自明の事に屬す。従つて公分母としての作用を爲す貨幣は其自身價值を有し得ざるは當然なり。」「具體的貨幣はその實體價值より離れて價值を有するや、又如何なる價值を有するや、之に對しては唯一の答あるのみ、即ち「貨幣は貨幣を以て購買し得る總ての物の價值を有す」と。然れども茲に問題と爲るは如何にして商品價值と貨幣價值との比較が成立するや、又人が評價を爲すに當りて貨幣を商品と同様に理解するやとの問題なり。前述の如く價值は人の思考の結果にして、貨幣は此際計算單位として役立つものなり。即ち貨幣に依りて總ての價值は數学的に表示せらるゝも、貨幣は抽象的價值單位として其自身評價の對象ならず、又觀念的にも然るを得ざるなり。……若し購買が貨幣と商品との交換なりとせば、兩者を評價せざる可からず、蓋し交換に於ては兩對象が其自身價值を有する商品として解釋さるゝ事が前提せらるればなり。然れども或物が評價され購買さるゝ場合には貨幣は其價值が考慮されざる固定的價值單位として考へらるゝは何人も經驗より知る所なり。従つて賣買に於て商品と貨幣とが交換さるゝとは表面的なる意味にして、決して商品と貨幣との經濟的比較に基く交換の意味には非ざるなり。此處に於て注意すべき二個の結論を生ず。既に吾人は貨幣は貨幣を以て購買し得る總ての物の價值を有する事を述べ、かゝる比較は評價に際して商品と貨幣とが同一の意味に理解さるゝ事に基くや否やを問題とせるが、今や吾人はその然らざるを知る。蓋し此處に問題とせらるゝ價值は本來の貨幣價值に非ずして、所謂貨幣價值に反映せる商品價格なる事を認識すればなり。更に價值は事物の特性に非ずして人の思考の結果なりとの吾人の出發點が正常なるものとせば、評價過程に入る物體——かゝる物體を貨幣とせば——は本來の意味に於ける價值を有し得ざるなり。貨幣の價值は誘導されたる價值にして、人の思考の結果として發見されたる「本來」の價值には非ざるなり」(Bendixen, Geld und Kapital, S. 21-24)と論じて貨幣價值の存在を否定せるが、更に貨幣價值問題に關する彼の所論を見るに、「貨幣價值に關する問題は現今の貨幣理論に屬せざるものなり。若し其價值が貨幣の購買力の意味に用ひらるゝ場合には其は價格の問題にして貨幣價值の問題に非ず。而して貨幣の主觀的價值の云々せらるゝ場合、又各人が貨幣に認むる心理的評價の云々せらるゝ場合にも亦誤の存するを見る。蓋しかゝる心理的評價は經濟理論に於ては全然觀察せられずして單に價值論者の論系中に存するのみなればなり。」「貨幣價值論は金屬主義學者の持論なり。貨幣と金屬とが同一視され、總ての交換が商品と金屬との交換なりとして觀察さるゝ限りに於て貨幣價值問題は意義を有するなり。然れども貨幣は抽象的價值單位の

表券の形式にて存在し、又金は貨幣制度に依りて貨幣に表示せられたる價值を有する事、典型的貨幣制度は其本位が貴金屬に結合する事なくして存立し得る事が一般に知らるゝ現今に於ては、貨幣價值問題は何等意義を有せざるなり。(Bendixen, a. a. O. S. 34)

クナップの遵奉學者中カール・エルスターはベンディクセンの如く國家學說を管に經濟貨幣理論に依る補足のみに止めずして、更に之を經濟學中に建設せん事を企圖せり。彼の思想はクナップ及ベンディクセンの基本的思潮を汲み、同時に近世に於ける表券學說の先驅者たるシュムペーターの影響を受け、表券學說の代表的思想を爲すものなり。

エルスターは今日の貨幣經濟の本質は交換經濟に非ずして團體經濟なりとし、クナップの所謂「支拂團體」、ベンディクセンの所謂「生産及消費團體」の觀念を承認せり。彼に従へば團體經濟に於ては各人は社會の爲めに生産しかゝる生産物を各人が消費するものなるが、之を生産の方面より見ればシュムペーターの所謂社會的生產物にして消費の方面より見れば社會的消費資料なり。而して自己の生産物を社會(市場)に提供し、之に對して貨幣を得たる者は、其貨幣に相當する社會的生產物に對する割前を受くべき可能性を有するものにして、各人の購買力は「賣買され消費さるゝ生産物に對する各人の參加能力を決定し、又かゝる生産物に對する各人の參加可能性を表すものなり。即ち貨幣は社會的生產物に對する參加可能性なり。」(Elster, Seele des Geldes, S. 28)而してエルスターは又支拂手段としての貨幣を社會的生產物に對する參加手段と爲せり。一經濟者が支拂を爲すは社會的生產物に對する彼の參加可能性と他の經濟者に移讓する事にして、かくて支拂は社會的生產物に對する參加可能性の讓渡に外ならず、從つて支拂手段としての貨幣は社會生產物に對する參加手段なり。」(Elster, a. a. O. S. 32)更に彼は價值單位としての貨幣を社會的生產物に對する參加尺度と爲せり。かくしてエルスターは貨幣に於て社會的生產物に對する「參加可能性」、「參加手段」並びに「參加尺度」の三個の定義を認めたり。

以上吾人はエルスターの貨幣本質觀の外廓を窺ひたるが、然らば吾人の本稿に於て主眼と爲す貨幣價值に就てエルスターは如何なる見解を有するや。此點に關しても彼は團體經濟の觀念より説明して曰く、「自己經濟と團體經濟とは價值に關して次の點に於て相異す。即ち自己經濟に於ては主觀的價值即ち効用及費用が支配すれども、團體經濟に於ては價格即ち客觀的數値が統制するなり。而して自己經濟に於ける價值即ち効用、費用の觀念は、現代の貨幣經濟、團體經濟を説明するには充分ならず、蓋し主觀的感覺としての價值より客觀的數字表示としての價格への橋渡しは存在せざればなり。」(Elster, a. a. O. S. 18)「主觀的價值と客觀的價值とは本質上全然相異せる觀念なり。然るに古典的價格理論は原始的使用價值より價格を導き出さん事を試み、評價の強度を數字的に表示し、各人の主觀的心理的感覺を數量的に取扱ひ、恰も主觀的感覺(評價)が客觀的數値(價格)と成れるが如き説明を試みたり。之明かに誤れり。主觀的評價に關する理論は貨幣理論の範圍に屬せず。貨幣理論に於て問題とせらるゝは客觀的價值なり。吾人が財貨の客觀的價值と稱するものは財貨間には存在せる數字的に捉へ得べき關係にして、財貨の價格と稱するものと本質上同等なり。かゝる客觀的價值は價格より初めて生ずるものにして、價格は主觀的價值として示さるゝ個人評價の表示に

は非なるなり。(Elsler, a. a. O. S. 73-75)「貨幣經濟に於て問題とせらるゝは價值に非ずして價格なり。交換に於ては交換する可き兩物體の使用價值の評價を必要とすれども、價格に支配するゝ貨幣經濟に於て行はるゝは交換に非ずして賣買にして、賣買の心理學の教ふる所に従へば貨幣の使用價值評價は行はれず、又貨幣は評價せられざるを以て其自身價值を有する事を得ず。吾人の觀念よりすれば「貨幣は價值を有するを要せず」に非ずして「貨幣は價值を有し得ざるなり」は價值は事物の特性に非ずして人の事物に對する關係なり。事物は唯人が之を評價する場合に、又評價するが故に價值を有するなり。貨幣經濟に於て行はるゝものは貨幣の評價に非ずして財貨の評價なり。即ち評價思想は貨幣を評價の對象として理解せず、又貨幣は人に評價せらるゝと云ふ總ての價值の前提を有せず、従つて貨幣は觀念的に何等價值を有し得ざるなり。勿論鑄貨として流通せる金屬個片は評價の對象たり得ると雖も、鑄貨はかゝる場合に於ては貨幣たらずして財貨たり商品たるなり。若し鑄貨がその素材的特性に基きて授受せらるゝ場合には、此處に生ずるものは全然貨幣經濟に於ける交換行為に非ざるなり。之を要するに貨幣經濟に於て行はるゝ賣買に際して評價するゝものは商品にして貨幣に非ず。評價せられざる貨幣は結局價值を有し得ざるなり。金屬主義學者が「貨幣は唯其が價值を有するが故に授受せられ、従つて貨幣は其自身評價せられ總ての商品の價值の比較を可能ならしむ」と主張せるは、商品交換より賣買に導く心理的過程を理解せざるなり。蓋し斯る學者は一方的歴史的觀察に誤られて賣買と商品交換との考量を混同すればなり。即ち賣買と交換との區別するゝ點は取引の對象に在らずして、其本質を決定する心理的内容に在ればなり。(Elsler, a. a. O. S. 223-24)

以上吾人は現存する貨幣價值本論の概略を其代表的論者に就きて考察し終れり。今之を總覽せんは、金屬主義者の所論を以てしては今日一般に行はるゝ貨幣特に紙幣現象に合理的説明を加へ得ざるなり。此點に關して職能價值論者の所論は更に一步を進めるも其説く職能の存在し得る所以を闡明せざる點に於て缺くる所あるを見る。指圖學說に至りては其所論徒に抽象に走りて現實の貨幣問題を解くに幾多の困難に遭遇せざるを得ざる可く、又購買力の意味に解せらるゝ貨幣價值問題を論外に逐ふ、之素より自由なりと雖も、貨幣に關聯せる最も重要な問題を回避するは決して貨幣現象の認識を助くる所以に非ざるなり。

吾人が所謂貨幣價值動態論に就て併せ考ふる時、貨幣價值本質性に關する議論と貨幣價值變動に關する議論との論理的干涉は未だ多大の研究を要する問題として吾人の目前に横はれり。而して從來存在する貨幣價值變動に關する理論と上述せる貨幣價值本質論の三潮流とは如何なる關係に立つや第一の問題にして、就中貨幣數量説には價值本質性に關する理論の極端相集まれり。シュムペーターが數量説は單なる貨幣論上の定理に過ぎず、貨幣價值の本質問題には觸るゝ所なしと言へるは決して妥當なりと爲すを得ず。キルマイヤーが貨幣價值本質問題は數量説に大なる重要性を説けるは吾人の賛同する處なり。商品學說の本質論が行はれずとすれば其動態論は廢止せらるゝに非るか。表券學說が正當なりとせば其本質觀に依り所謂貨幣價值の動態論を如何に打建つ可きか。此問題に於て數量説は最も吾人に暗示を含むものと感ぜらる。以上の貨幣價值本質性に關する研究も此意味に於て多大の意義ありと信するものなり。